

若 園

1 9 8 1

菊水町教育委員会



若 園

1 9 8 1

菊水町教育委員会

序 文

菊水町教育委員会では、昭和55年度国庫補助事業による若園台地の埋蔵文化財発掘調査を実施致しました。若園台地の一角には菊池川流域で最も上流に位置する貝塚として古くから知られた若園貝塚があります。この貝塚の性格・年代等は前回の調査で明らかとなっておりますため、今年度の調査は、貝塚に関係した住居址その他の遺構の確認を明白にしようとの意図のもとに実施したものです。調査の結果、貝塚周囲の台地上には、貝塚に伴う住居址等遺構は存在しませんでした。貝塚の範囲確認の際に、住居址に関連するものと思われる手がかりを得ました。さらに土器をはじめとして種々の遺物が出土しております。これらの成果が、本報告書を通じて、文化財保護に対する認識を高め、学術上の一助になれば幸いに思います。

調査にあたりましては、九州大学医学部解剖学教室、熊本大学文学部考古学研究室、さらに多くの諸先生方の御協力・御指導を仰ぎました。茲に厚く御礼申し上げます。

昭和56年 3 月31日

菊水町教育長

戸 上 保 昌

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町における昭和55年度埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は昭和55年10月より昭和56年3月における国庫補助事業として、菊水町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、池田道也・西住欣一郎・吉田収が主に行った。製図は池田道也が実施した。
5. 本書の編集は、福永光隆・池田道也・吉田収が担当した。

本文目次

一、調査区の位置と環境	1
二、調査区の目的・方法・経過	1
三、調査結果概要	3
1. 層序	3
〈A-a区〉	3
〈A-b区〉	3
〈B区〉	4
〈C-a区〉	4
〈C-b区〉	5
2. 遺構	5
〈A-b区〉	5
〈C-a区〉	5
3. 出土遺物	13
〈A-b区の遺物〉	13
〈C-a区・C-b区の遺物〉	13
四、まとめ	18
付篇、菊水町下津原東出土の上原石棺について	46

挿 図 目 次

第1図	若園遺跡位置図	6
第2図	菊池川流域主要貝塚位置図	7
第3図	調査区位置図	8
第4図	A-b区、C-a区、C-b区グリッド配置図	9
第5図	A-a区、及びA-b区の各グリッド断面図、平面図	10
第6図	C-a区グリッド断面図	11
第7図	〃	12
第8図	若園貝塚出土土器	20
第9図	〃	21
第10図	〃	22
第11図	〃	23
第12図	〃	24
第13図	〃	25
第14図	〃	26
第15図	〃	27
第16図	〃	28
第17図	〃	29
第18図	〃	30
第19図	〃	31
第20図	〃	32
第21図	〃	33
第22図	〃	34
第23図	〃	35
第24図	〃	36
第25図	若園貝塚出土石器	37
第26図	若園貝塚出土遺物	38
第27図	上原石棺実測図	47

調 査 組 織

調査主体	菊水町教育委員会
調査責任者	小林 泉（前菊水町教育長） 戸上 保昌（菊水町教育長）
調 査 員	池田 道也（菊水町歴史民俗資料館学芸員） 西住欣一郎（熊本大学文学部大学院）
事務総括	前川 一九（菊水町歴史民俗資料館館長） 福永 光隆（菊水町文化課）
事 務 局	吉田 収（菊水町文化課） 松葉 朝子（菊水町文化課）
調査指導	白木原和美（熊本大学文学部教授） 甲元 真之（熊本大学文学部助教授） 隈 照志（熊本県文化課係長） 松本 健郎（熊本県文化課技師） 田中 良之（九州大学医学部助手）
調査協力	熊本大学考古学研究室・熊谷 知徳・米倉 秀紀・ 谷口 武範・小畑 弘己・西谷 大・坂田 和弘 入江 久成・吉武 学・九州大学医学部
作 業 員	林田 勝龍・坂木 拾・池田 敏雄・宮川 千俊 池田 英臣・坂本 則行・小林ツヨミ・業内 静子 中山 久子
地元協力	前瀬 治・池田 知義

若園遺跡調査報告

一、調査区の位置と環境

若園遺跡は、若園台地上に分布する埋蔵文化財包蔵地の総称で、若園台地は熊本県玉名郡菊水町大字江田字若園に位置する（第1図参照）。

菊水町は、県北部を流れる菊池川によって形成された菊池平野と玉名平野のほぼ中間にあたる山間部に位置し、町西北部を菊池川が貫流している。菊池川が、その支流の江田川と合流するあたり、すなわち若園遺跡のある附近から下流にかけて広大な玉名平野が拓けている。

若園台地に隣接するすぐ南方の江田川を隔てた清原台地には江田船山古墳、塚坊主古墳、虚空塚古墳などの古墳群があり、附近には縄文時代後期後葉の松坂原遺跡^(注1)があるほか、台地周辺のいたる所に見られる小規模な凝灰岩の露頭には、横穴群が形成されている^(注2)。さらに菊池川の対岸（玉名市）には、大坊古墳、永安寺西、東古墳などの装飾古墳がある。

若園遺跡の西端には、古くから知られている若園貝塚がある。この貝塚は、菊池川河口から約15kmの上流にあり、菊池川流域では最も内陸部に位置する貝塚で、玉名平野周縁部には10数ヶ所に貝塚が分布している^(注3)。（第2図参照）。

二、調査の目的・方法・経過

今回は、調査の目的として以下の確認事項があった。

- ① 貝塚に伴う住居址等遺構の確認
- ② 貝塚の範囲確認
- ③ 遺物包蔵地の分布確認

②の項目については、昭和50～52年にかけての菊池川流域文化財調査の一環として、その一部が確認済である。したがって今回は、未確認の東南～南～南西方向を中心に調査を実施した。

調査区に該当する地域は約25,000㎡で若園台地のほぼ半分を占める。その約75%に杉を植樹しており、台地中央は現代の墓所となっている。杉の樹令は、15～25年のものが多い。①の調査は主として現在何の土地利用もされておらず竹藪あるいは雑木林となっている部分について実施し、4m×4mのグリッドを設定した。②の調査については、杉林を中心に1m×2mの小グリッドを設定した。③の調査は、現況がミカン畑と樹令4～5年の杉林であったため、状況に応じて発掘区を設定した。また、①②③の調査区をそれぞれ①がA-a地区・A-b地区を中心に、③がB地区、②がC-a地区・C-b地区を中心に調査を実施した。（第3図参照）。

調査経過は以下の通りである。

10月1日～3日、10月6日～9日、若園台地全域の踏査及び調査区の再確認。

10月21日～10月23日、10月27日、A-a区の伐採。

10月28日 A-a区に4m×4mのグリッド設定。

10月29日～10月31日 A-a区のC-4、C-9グリッド発掘。

11月4日～11月6日 A-b区の伐採。

11月7日 A-b区に4m×4mのグリッド設定。

11月10日 C-3、C-5グリッド発掘。

11月11日 D-5グリッド発掘。

11月12日 C-5、D-5グリッド発掘。

11月14日 C-5、E-8グリッド発掘。

甲元真之熊大助教授が現地訪問、調査指導をうける。

11月17日 C-5、E-8グリッド発掘。

11月18日 E-8グリッド発掘。県文化課松本健郎技師が現地訪問、指導をうける。

11月19日 E-9、D-8グリッド発掘。

12月1日 E-9グリッド発掘。

12月3日 E-9、E-10グリッド発掘。

12月4日～12月5日 E-10、E-11グリッド発掘。

12月8日 E-11グリッド発掘。

12月9日 雨天で作業中止のため、県文化課へ行き関係長から今後の調査についての指導をうける。

12月10日 E-11グリッド発掘。

12月11日 E-8～E-10グリッドの写真撮影及び実測。

12月16日～12月17日 A-c区1～4を発掘。

12月22日 玉名高校田辺哲夫校長からアドバイスをうける。

1月5日 B区1m×1mの小グリッドを25ヶ所設定。

1月6日～1月10日 B区発掘。

1月12日 C-a区に1m×2mの小グリッド設定。

1月13日～1月19日 C-a区発掘。

1月20日 17グリッドより埋葬人骨出土。

1月22日～1月23日 九大医学部の田中良之助手に人骨の取り上げを依頼。

1月25日～1月30日 C-a区発掘及び測量。

2月2日 C-b区に1m×1mの小グリッド設定、測量。

2月3日～2月6日 C-b区発掘。

三、調査概要

調査はA-a区→A-b区→B区→C-a区→C-b区の順に実施した。次にそれらの概要を述べる。

1. 層序

〈A-a区〉

調査前の状況は竹藪であった。竹に混って樹令15年ほどの雑木が見られた。この状況になる以前は桑畑であったらしい。4m×4mのグリッドを設定し、まず3個のグリッドを選定し発掘した。結果的には3個とも全く同様の層序で、I～III層に区分できた。(第5図参照)

I層 厚さ15cm～25cmで暗褐色を呈する腐蝕土である。現代の陶磁器片を少量含んでいる。

II層 茶褐色を呈する風化花崗岩の砂層。砂粒は非常にキメ細かく、雲母粒を含む。遺物は含まない。II-a層とII-b層に細分できる。

III層 明褐色を呈する風化花崗岩の砂層。粒径3～4mm程度のほぼ均一した砂粒子の層で遺物は含まない。一般にマサ土と呼ばれているものである。

部分的には樹木の根による攪乱が見られるが、A-a区全体を通じての層序の乱れは殆どなく土層が削平されたような痕跡も認められない。

〈A-b区〉(第4図参照)

A-a区と同様、全域が竹藪であった。同区も全域に4m×4mのグリッドを設定した。

A-b区の層序は、一部を除くと基本的にはI～III層に区分できた(第5図参照)。

I層 厚さ20～30cmの層の旧耕作土である。桑を植えてあった時の痕跡が明瞭に残っている。細かい砂粒子を含み褐色を呈する。ごく少量の縄文後期～現代の土器細片を含む。

II層 厚さ5～65cmで薄厚の差が著しく同発掘区を西側へ移行するほど、この層の厚みが増す。中世～近世の土器を少量含み、この層からIII層へのピット状の掘り込みが各グリッドに見られる。やや粘性をもち、褐色を呈する。III層の赤褐色土(ローム)がブロック状に混入した箇所が同発掘区の東側に見られる。

III層 赤褐色の粘質ローム層である。各グリッドでの地表からの深度は、東→西あるいは、北→南へと移行するに従って増加し、このことは、II層の厚さに比例する。

同区では、C-3、B-5、C-5、D-5、E-8、E-9、E-10、E-11のグリッドを発掘したがC-5グリッドを除く全部が前述の基本的層序に合致する。C-5グリッド(第5図参照)は、II層をさらに3層に細分できる。

II-a層 基本的層序のII層と同じ。この層の上部からII C層にかけて落ち込みII-a'層が見られる。

- II b 層 黒色土層。少量の中世の土器細片を含む。
 II c 層 やや粘性を帯びた褐色土層でロームがブロック状に混入している。

〈B区〉

I～III層に分層できた。各層の様相はA-a区に類似している。

I 層 15～20cmの厚さで、破砕された現代の陶磁器片を少量含む。暗褐色を呈し細かい砂粒を含む。

II 層 茶褐色を呈する風化花崗岩による砂質土層である。厚さ20～40cmを測る。

III 層 暗褐色を呈した風化花崗岩の砂層である。

なお、II～III層からの遺物は皆無であった。

〈C-a区〉(第4図参照)

現状はミカン畑である。同区には全部で30個の小グリッド(1m×2m)を設定した。当初の予定では、30個の中から3分の1ほどを選定し開掘する予定であったが、後世の削平により一部が攪乱をうけていたため、初原の状態にある貝層をより正確に把握するために、18個を無遺物層まで開掘し5個を貝層上面の検出だけにとどめた。残り7個は樹木の損傷を考え開掘しなかった。

同区は、①削平をうけている部分、②削平された攪乱土で被覆されている部分、③未攪乱の部分、に分けることができる。なお②の被覆土層の下は未攪乱の層が存在する。

同区の土層はI～Ⅳ層に大別でき、Ⅴ層はさらに4つの層に細分できる。

(I層) 耕作土。耕作によって破砕された土器片を含んでいる。一部に貝殻細片を含んだ箇所もある。

(II層) 褐色の砂質土層で、縄文後期を中心とする遺物を少量含む。

(III層) 暗褐色を呈するやや粘性を帯びた層で貝層の無い小グリッドに多く見られる。少量の土器片を含む。

(IV層) 粘性を帯びた黒褐色の層で、土器片の他に獣骨などを多く含んでいる。貝層には附随して見られる有機質土層である。縄文後期を中心とする土器を多く含む。

(Ⅴ層) 貝を含む層で次の4層に細分する。

○Ⅴa層 混貝土層。土質そのものはII層のそれに類似する。

○Ⅴb層 混土貝層。土質はⅤa層に同じ。

○Ⅴc層 純貝層。Ⅴa～Ⅴc層いずれも縄文中期～後期の土器片を含んでいる。

○Ⅴd層 混貝赤褐色土層。土質はⅣ層の粘質ロームであるが、Ⅴ層つまり貝層の範疇に入れて分類した。

(Ⅵ層) 黄褐色を呈する木炭を含んだ層で、C-a区において部分的に見られる層である。

(Ⅴ層) 赤褐色を呈する粘質ローム層である。出土遺物なし。

(Ⅳ層) 灰黄色を呈する砂層である。菊池川寄りの小グリッドに見られる層で、砂の粒子は非常に細かい。出土遺物なし。

以上がC-a区に見られるⅠ～Ⅳ層の概要(第6図～7図)であるが、開掘したグリッドによってその様相はかなり異っている。それは、前述したように後世の開墾のために、ある場所は削平、ある場所は土の被覆をうけているためである。貝塚形成当時に比べ現地はかなり平坦になっていることがわかる。盗掘穴と思われる擾乱もかなり多い。純貝塚は11・12・14・15・16・22グリッドに見られる。

〈C-b区〉(第4図参照)

樹令5～6年の杉及び松を植樹してあるため、立木に損傷を与えないように留意に小グリッド(1m×1m)を13個設定した。実際に開掘したのは10個である。層序は基本的にはC-a区と同じである。

2. 遺構

A-a区、B区、C-b区には遺構の検出はなかった。A-b区、C-a区にピット状遺構を検出した。順次その概要を述べる。

〈A-b区〉(第5図参照)

調査前、住居址検出の可能性が最も高い地区と考えていた所である。前述のように、4m×4mのグリッドを設定し、入念な調査を実施した結果、多数のピット状遺構を検出した。しかしながら、①竪穴式住居に伴う壁の立ち上がりが見られないこと、②縄文期の遺物が極端に少ないこと、③炉址もしくは焼土がピット付近に見られないこと(但し、若干離れた位置に焼土を検出したが、これは中世の遺物が共存した)、④遺物の大半が中世～近世のものであること、などの理由から、これらのピット群は中世あるいは近世のものと断定してさしつかえないものと思われる。

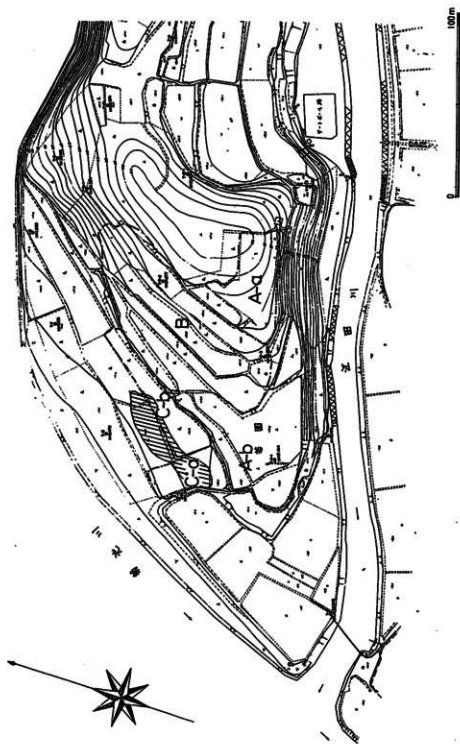
〈C-a区〉

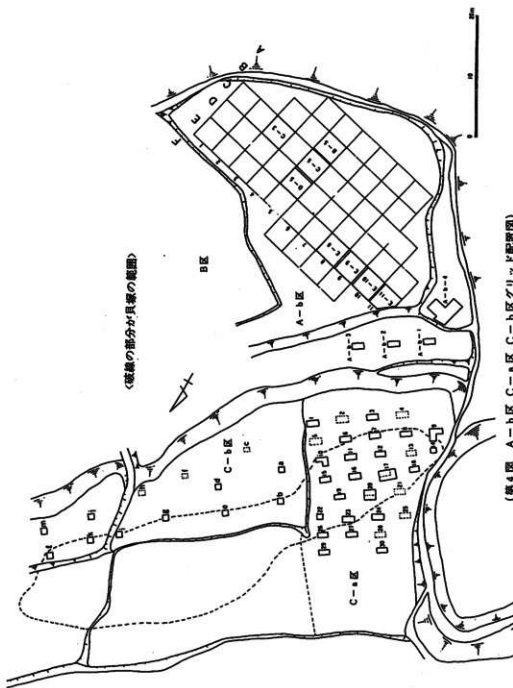
前述の如く、同区は貝塚の範囲確認のための調査区である。したがって、1m×2m弱の小グリッドから検出したピット状遺構は、面的に把握されたものではないため、断定し難い点もあるが、調査者の主観では縄文期つまり貝塚に伴う住居址のピットである。これらのピットはすべて無遺物層(Ⅳ層)まで達し、ピットの見られる所には例外なくⅤ～Ⅵ層あるいはⅦ層が



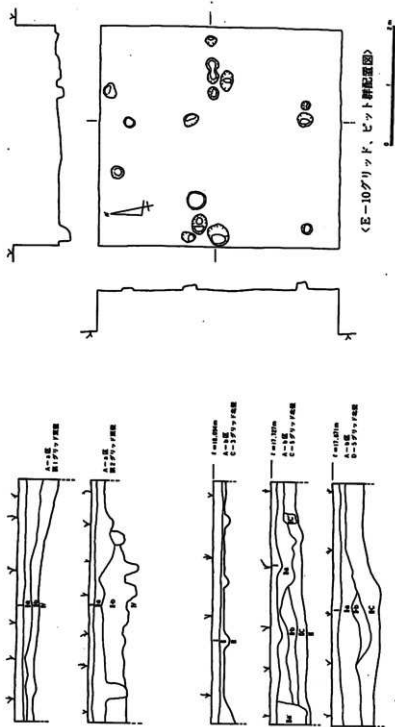
- | | | | |
|----------|----------|-----------|-----------|
| 1. 若園貝塚 | 5. 年ノ神貝塚 | 9. 片源訪貝塚 | 13. 湯ノ浦貝塚 |
| 2. 繁根木貝塚 | 6. 中道貝塚 | 10. 竹崎貝塚 | 14. 外平貝塚 |
| 3. 桃田貝塚 | 7. 庄司貝塚 | 11. 尾田貝塚 | |
| 4. 尾崎貝塚 | 8. 古閑原貝塚 | 12. 齊藤山貝塚 | |

(第2図 菊池川流域主要貝塚位置図)

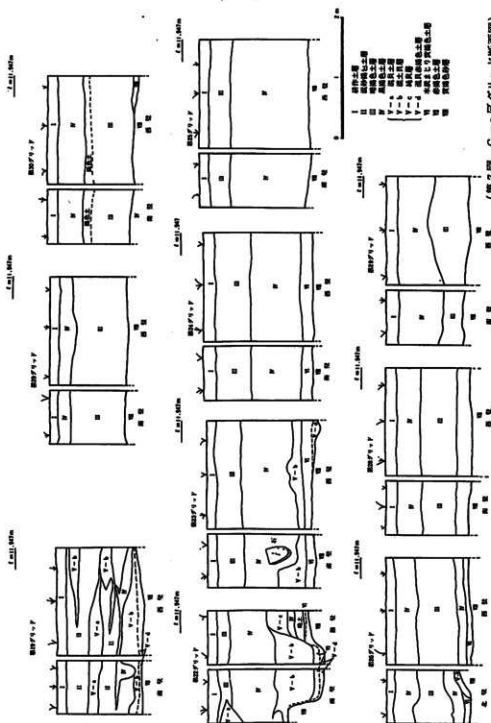




(第4図 A-b区、C-a区、C-b区グリッド配置図)



※各層における詳細は本文参照のこと。 (第5図 A-a区及びA-b区の各グリッド断面図、平面図)



(第7図 C-a区グリッド断面図)

観察できた。

3. 出土遺物

出土遺物は、土器・石器・骨角器・貝製品・鳥獣魚骨・貝類・埋葬人骨など実に多様である。A-a区、B区からの遺物の出土はなかった。遺物の大半は、貝塚すなわちC-a区、C-b区の出土であるが、A-b区からも中世の遺物を中心に若干ではあるが出土している。A-b区の遺物から述べる。

〈A-b区の遺物〉(第24図258~262)

縄文式土器は、258・259・260の3点である。258は出水式系で非常にもうい。259・260は縄文式系土器である。258は3層出土で同一層から中世の遺物も出土している。259・260は1層の旧耕作土層から出土している。明らかに3点とも後世の混入である。261・262は両方とも底部の切り離しが、回転糸切りの手法を用いている。261は、体部が幾分開いて立上り、器面の内外には刷毛による横なでが加えられている。底径7.8cm、口径10.8cm、高さ1.2cmを計る。262は全体的に磨耗が著しく、体部の立上りは261より鉛直気味に立ち上る。底径6.6cm、口径7.8cm、高さ1.2cmを計る。

〈C-a区・C-b区の出土遺物〉(第8図~第26図)

C-a区とC-b区はともに貝塚の範囲確認のための調査区であり、両調査区の区別は調査の便宜上設定したものである。したがって遺物の検討にあたっては両者の区別は無意味であるから、ここでは両調査区の遺物を一括して扱う(但し、第1表に両調査区の別は明記する)。

◎土器

(イ) 縄文式土器

出土遺物の大半を占める。中期~後期に及ぶが、撓乱も多く、すべてが層位的に把握されたものではない。したがって、ここでは前回調査の報告書を参考に、これらの遺物をA~E類に大別し、さらにそれぞれの類ごとに細分し説明を加えることにする。(第1表を参照)。

〈A類〉(第8図~第16図122~125)

四線文を主体とする文様構成を持つもの、及びそれから派生したと考えられる文様を持つものである。次の5種に細分する。

(A-I類・1~17)

指先・棒などによる太形四線文・押文が施されたもの。曲線文を主体とする。文様帯は口縁

部に集中する傾向にあるが、曲線・直線・押点を組み合わせた文様構成をなし、文様帯下のへう削り、文様帯の肥厚などは著しく認められない。10以外はすべて口唇が凹凸になる。14は押点というより、内外から交互に押圧を加えることで、真上から見た口唇形状は、波状を呈している。7・11・16は胎土に滑石粉を含む。全体的に焼成が良い。

(A-Ⅱ類・18～79、第10図)

文様が単純化し、直線的となる。口縁部の文様帯は、幅が狭くなり、その下はへう等でナデあるいは削りが施され、わずかに肥厚気味となる。へう削り、ナデは口唇部にも多く施されている。また、文様帯が、粘土を貼り付けることで肥厚しているもの(48)や、三角形状に削り取って凹文を施しているもの(42・43)、隆帯上に凹線を描いたもの(62)なども含まれる。

(A-Ⅲ類・80～109)

A-Ⅲ類よりさらに凹線文が萎縮し、直線化・細線化する。口縁部は文様帯の肥厚が顕著になるものと、肥厚せず文様が細線化・直線化のみにとどまるものがある。粘土帯を貼り付けることで文様帯を肥厚させたものに、83～86・88・90・91があげられ、胴部に列点文や沈線気味の文様をもつものに94～99がある。100・101は、文様帯が肥厚するかわりに、いくぶん細線化した凹線が胴部にかけて、わりあい広く展開するもので、100は内側にも文様を持ち、101は胴部が大きく張り出すという特徴を示している。102～104、106～109なども文様帯を作り出さず、細線化した文様だけが残ったものである。これらのA-Ⅲ類は、いずれもA-I類から変化したものと考えられるが、中には明らかに細分したほうがよいものも含まれている。しかし量的に少ないので、今回は一括して扱った。

(A-Ⅳ類・110～117)

貼付突帯上に、押点文・凹線文・刻み目を施したもの。晩期の山ノ寺式の系統とは異なるもので、ここで取り扱うのは、A-I類の2に見られるような押点文が変化したと考えられるものである。110・111・113などは押点文の変態形態として直接的にはとらえにくい。貼付突帯上に何らかの手法を加えている点と、胎土・焼成等から太形凹線文の系統に入るものと考えられるため、ここに分類した。

(A-V類・118～125)

貼付による突帯、把手を有し、凹文等の文様を施さないもの。123は胎土・焼成・整形等きわめて良好で、さらに、丹塗りの土器であるため、弥生式土器のそれに酷似している。しかし、欠落してはいるものの明らかに把手痕が認められる。胎土・焼成は、A-Ⅳ類の110に類似する。

〈B類〉(第16図126～137、第17図)

無文土器を一括した。次の3種に細分する。

(B-I類・126～140)

口唇部に押点・刻み目を有するもの。粘土の巻き上げの接合部が、127・128・132・136・138～140の表面に観察できる。134は薄手で、内外に粗い条痕が残っている。

(B-II類・141～147)

ナデあるいはヘラ削り等で口唇が平坦なもの。141は粘土巻き上げの接合部が観察できる。141を除いた他は、B-I類に比べいくぶん厚手である。144は浅い条痕が残っている。

(B-III類・148～155)

148・149などは、B-I類に似ているが、やはり口唇部の粘土を貼り付けた隆起部の上だけに押点を施しているだけなので、ここに分類した。

〈C類〉(第18図、第20図・198)

深鉢形の器形で、口縁部を中心に単純な文様帯を持つもの。口唇部上に逆W字状の貼付や、把手を有するもの(198)がある。A類、B類に比べ、頸部がしまり、胴部が張る器形である。逆W字状の貼付を有するものに、198の他157があり、168・170・172・173などの貼付も、157・198からの変化が考えられる。169の突帯上に刻み目を有する点は、A-IV類と同じであるが、口唇部上に貼付け突起を有する点、及び頸部がしまり、胴部が張り出すという点が172に類似し、ひいては、C類の特徴からの変化形態であると考えられるため、ここに分類した。

〈D類〉(第19図、第20図・190～197、199～206)

鉢形、皿形の器形が主で、ヘラあるいは棒状施文具による直線・曲線の沈線文を主体とする。大半は磨消文の手法を混じる。次の3種に細分する。

(D-I類・175～189)

磨消縄文の手法を加えるもの。D類の中では、この種が最も多い。把手を有するものに、175・181がある。175は把手がすでに欠けている。178は、皿形をなすと思われる。177は浅鉢で、胴部の「く」の字に屈曲する部分に1cm強の穴があき、そのまわりを耳環状に沈線が囲んでいる。穴の真上が山形口縁の頂きで、全体形では四つの山形を形成するものと思われる。182・184・187を除くすべてに研磨が施されている。184は、やや太めの2本の沈線の組み合わせで文様を構成しており、この分類の中ではより古い段階に位置づけられよう。胎土・焼成はきわめて良く、赤褐色を呈する。

(D-II類・190～197)

貝類による擬似縄文を有するもの。197を除くすべてに研磨を施し、胎土・焼成は全体的に良好である。192の擬似縄文は、ハイガイ等の放射筋を押捺したもので、これを除いた他のものは小巻貝の回転押捺によるものである。

〈D-Ⅲ類・199～206〉

磨消文を施さないもの。201は橋状把手を有し、把手には渦巻文が施されている。200は口縁上端の外側に突起を付け、その部分に口唇部から外側斜め下方に向けて穿孔を施してある。口唇部には、穿孔の左右に列点文を施す。沈線の状態は、D-I・II類と同じで、199・202・203はへら状施文具で、若干幅が広くて深い沈線を施している。

〈E類〉(第21図・207～210)

爪形文を有するものの一群である。これらは、A-N類の刻み目を付けるものから変化したものとも考えられ、A類の変化した一形態と考え、A類の中に分類すべきかもしれないが、一応別に分類した。今回出土の爪形文は、いずれも整然とせず、不ぞろいである。207は二列に並行する爪形文の間に浅い凹線が認められる。208は胴部外面に浅い条痕が認められる。

以上に底部を除く縄文式土器について、ごく簡単に述べてきたが、分類した中には再考を要するものがあり、例をあげればC類の169・172などで、これらはA類に分類すべき要素を含んでいる。中九州においては、後期になると、在来の太形凹線文系に磨消縄文系などの要素が加わり、複雑な土器文化を展開する。若園貝塚出土の土器の分類を、従来通りの土器形式名にあてはめると、A類が阿高式・南福寺式・出水式・市来式・B類もA類と同様の形式の無文系のものである。C類は北久根山式にあたり、中には市来式の系統に近いものが含まれている。D類は鐘ヶ崎式・西平式系のものである。E類は御手洗A式に該当するものであるが、207は中期前葉の並木式に近い要素を含んでおり、灰褐色を呈し、胎土・焼成は良好である。ごく一部を除くと、土器の大半は中期後葉から後期にかけてのもので、若園貝塚の形成時期も、中九州一帯に瀬戸内地方から磨消縄文系の文化が流入する時期にあたり、さまざまな土器形式が見られる。これまで確認されている資料、及び今後新たに加わるであろう資料をもとに、あらためて検討しなければならない点が多い。

〈底部〉(第21図・211～220、第22図、第23図、第24図・246～254)

平底(211～233)と高台状のもの(246～254)がある。平底には、(1)木の葉圧痕が認められるもの(211～220)、(2)鯨背椎骨圧痕が認められるもの(221～231)、(3)圧痕の認められないもの(232～245)に区別できる。高台状の底部に施された文様はA-Ⅲ類及びC類に共通点が見いだせる。250には三本の平行沈線の間に縄文が認められる。

〈ロ〉縄文式土器以外の土器(第24図・255～257)

縄文式土器以外にも、須恵器、土師器、弥生式土器、磁器など多数のものが出土したが、い

いずれも小片で、図示可能なものは次の3点である。255は土師器の高環で脚部が残るだけである。磨耗が著しいが、表面には放射状にハケ目痕が認められる。256は土師器の壺の口縁部である。外側にはほぼ水平にハケ目痕が認められ、内側は水平のハケ目と、下方から斜め上方へ引き上げたハケ目痕が認められる。257は土師器のミニチュア型埴で、胎土・焼成は良く、整形は雑である。これらの縄文時代以降の土器は、主として貝塚西側から河川寄りに集中して出土している。

◎石器（第25図・1～9、第26図・10～18）

すべてC-a区、C-b区の出土である。

（イ）磨製石斧・1～2・

1は20グリッドの暗褐色土層、2は27グリッドの暗褐色土層からの出土である。1は頭部を欠失しているが、全体的に整形は入念である。2は刃部を欠失している。研磨は刃部周辺を中心に行われたと思われ、頭部周囲には研磨痕が見あたらない。

（ロ）打製石斧・3～4・

3・4とも14グリッドの暗褐色土層の出土である。両方とも整形が粗く、特に4は未製品と思われ、一部には自然面も認められる。

（ハ）磨石・5～9

すべて砂岩製の磨石である。5・9は27グリッドの暗褐色土層出土、6・7・8は18グリッドの混土貝層出土である。5・9は厚く、磨耗度が少ない。6・8は両面ともよく磨耗している。7は、片面は普通の磨石と同様に平坦に磨耗しているが、一方の面は中央がくぼんでいる。別の用途が考えられる。

（ニ）石鏃・10～11・

10は18グリッドの純貝層の出土で、黒曜石製である。両脚をそれぞれ欠損しているが、残存部よりV字状の挟り込みを有することがわかる。細部の調整も入念である。11は19グリッドの混土貝層の出土で、サヌカイト製である。完成品であるが、調整は10に比べてあまり丁寧とは言えない。脚部の挟り込みも少ない。

（ホ）石鏃・12・

石鏃はこの1点だけである。自然の小円形礫の両端に、両面から剥離を加えて紐かけを作っている。17グリッドの墓域内の出土である。

（ヘ）石棒・13・

18グリッドの混砂褐色土層の出土である。両端を大きく欠いている。

（ト）刃器・14～18・

5点ともサヌカイト製で、それぞれ粗い剥離で整形している。刃部の調整はあまり丁寧ではなく、14・16・17・18の刃部は、主要剥離面を形成したときの縁辺を利用している。15は内反

りの刃部を持ち、二次調整がみられる。14は17グリッド耕作土層、15は11グリッド混貝赤色土層、16・18は14グリッド混土貝層、17は12グリッド混土貝層から、それぞれ出土している。

○骨角器（第26図・19～23）

（イ）貝輪・19

この1点だけである。サルボウ製の破片で、研磨は丁寧である。15グリッド純貝層の出土。

（ロ）垂飾品・20～21・

垂飾品は2点である。20はイノシシの牙を利用したもので、その牙根端に横から3mmの小孔を穿ち、片面は中ほどから末端にかけて先細りに磨耗している。19グリッド混土貝層の出土である。21は鹿角小片を研磨整形したもので、縦長の三角形を呈している。一端には2個の径1.5mmの小孔を穿ち、さらに中ほどの縁辺寄りには貫通していない小さくぼみが見られる。先細りとなった一端は、薄く研磨され、あるいは鏤としての使用も可能であるかのような特徴を呈している。22グリッド耕作土出土。

（ニ）釣針・22～23・

釣針として確認できたものは2点である。22は15グリッド純貝層の出土で、小型であるが結合式釣針の針軸の部分である。果下では、結合式釣針は浜洲貝塚、沖ノ原貝塚から出土例があり、両者とも10cmを超す大型の針軸である。22も小型ながら針先を結合する溝部が明瞭に残っている。上端を欠くが残存長は3.5cmを計る。23も22と同じ15グリッド純貝層の出土である。図示の如く、残存部が少ないため、釣針との断定はしがたいが、軸上部端の挟り込みは、釣針としての特徴を具えており、その可能性は十分考えられる。22・23ともに鹿角製である。

四、まとめ

今回の調査は、『二、調査の目的・方法・経過』の項で述べたように、三つの目的があった。第一に「貝塚に伴う住居址等遺構の確認」であるが、結果から先に述べると、遺構の全体像が判明するようなものは検出しなかった。このことは、貝塚に伴う何らかの遺構の存在を否定するものではない。調査自体も台地の全域に実施されたものではなく、調査の対象となった地区のうち、A-a区、A-b区、B区に限っては、貝塚に関連した遺構が存在しなかったが、貝塚とそれに隣接する地区、すなわちC-a区、C-b区の調査では1m×2m弱の小グリッドに、明らかに住居址に伴うものと思われるピットや焼土、床面などを確認した。しかし、この調査は第二の目的である「貝塚の範囲確認」であったこと、さらにミカン、杉、榎等を植樹してあったことなどの理由で、それぞれのグリッドの拡張が不可能であった。遺構の全貌が把握できなかったのは、こうした理由による。しかしながら、本来の目的である「貝塚の範囲

確認」は、前回及び今回の調査で明確となった。貝層の広がり、前回の調査結果と総合して考えると、東北～南西間の長さが約76m、南東～北西間の幅が10mから18m（第4図参照）で細長い形状である。但し、台地寄りの南東側は、後世の開墾により削平をうけており、そのため貝層が消滅していることは明らかである。したがって南東～北西間の幅は、多少広がると考えられる。次に第三番目の確認事項の「遺物包蔵地の分布確認」は、前述の遺構の項にあるように、貝塚以外では、A-b区に中世～近世の包含層が見られるだけである。台地中央から北側及び東側にかけて調査のできなかった地区もあるが、A-a区、B区の状況から判断すると、良好な包含地の存在する可能性はきわめて少ない。

若園貝塚は、これまで述べたように後世の開墾や植樹の他、古くからよく知られた貝塚であったため盗掘穴らしき擾乱も認められる。こうした理由で、一部はかなり荒れた状態にある。しかし、まだ保存状態の良い部分も多く、遺物も多様で豊富であることは、前回及び今回の調査で明白である。菊池川流域に存在する多くの貝塚が、荒廃の一途をたどりつつある現状から考えても、若園貝塚は、遺跡の保存状態、遺物の豊富さなどから、今のところは一級の遺跡と言っても良い。しかし、植樹された立木は、貝層の養分のためか成長が著しく、それに相反し貝層は年々と荒廃していくといった現状である。

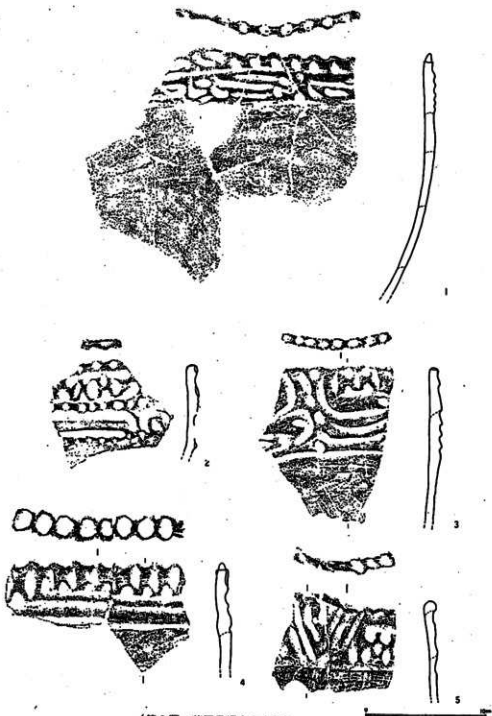
注1. 昭和48年田添夏喜氏調査。遺物は御領式土器、十字形石器、埴、土偶など多数。大部分は菊水町歴史民俗資料館に収蔵。

注2. 池田道也「北原・長刀横穴群」菊水町文化財調査報告書第2集、昭和54年度。

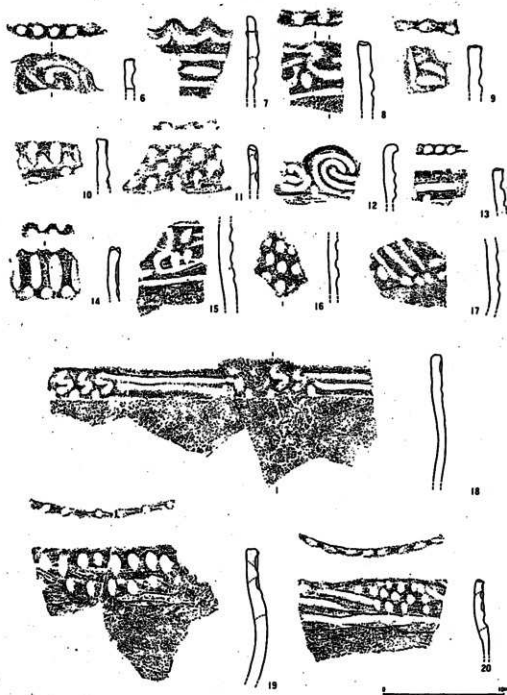
注3. 和島誠一「北九州における後水期の海邊海退について」『日本考古学の発達と科学的精神』和島誠一著作集刊行会、昭和48年。他

〈参考文献〉

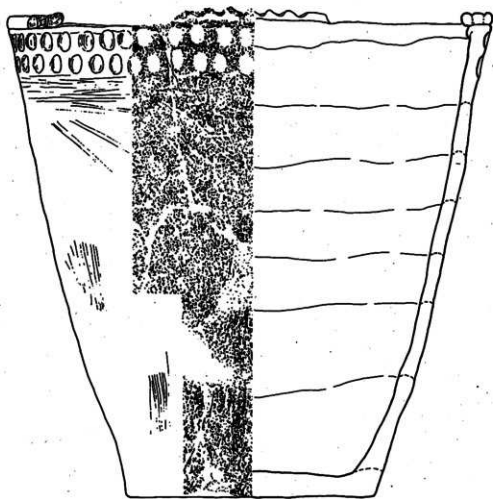
- ・松本唯一「風土」『熊本県史・総説編』昭和40年。
- ・松本健郎「若園貝塚」『菊池川流域文化財調査報告書』熊本県教育委員会、昭和53年。
- ・三島格「縄文文化」『熊本県史・総説編』昭和40年。
- ・三島格「鯨の骨椎骨を利用せる土器製作台について」『古代学』第10巻1号、昭和37年。
- ・西田道世「黒橋」熊本県教育委員会、昭和51年。
- ・乙佐重隆「九州」『日本の考古学』II
- ・西田道世「阿高貝塚」城南町教委、昭和53年。
- ・岡本勇「縄文時代の生活と社会」『日本の考古学』II、他。
- ・富田絃一「新・熊本の歴史」1。
- ・富田絃一「熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書」熊本市教育委員会、昭和53年度。
- ・田中良之他「新延貝塚」鞍手町埋蔵文化財調査会、昭和55年。
- ・賀川光夫他「石原貝塚・西和田貝塚」宇佐市教育委員会、昭和54年。他



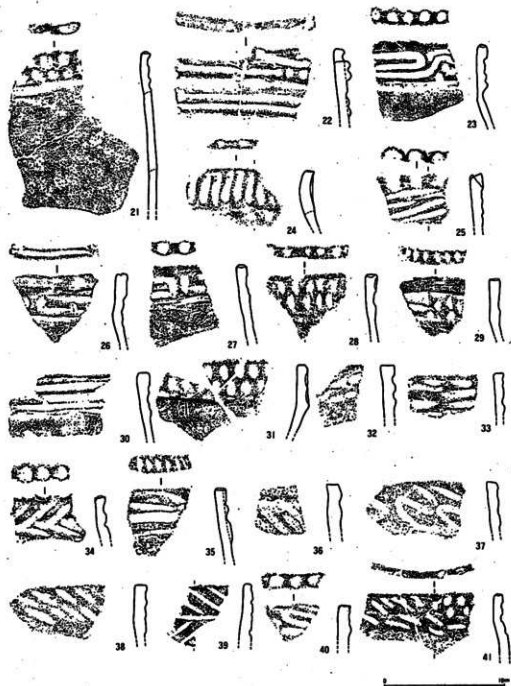
(第8圖 若園貝塚出土土器)



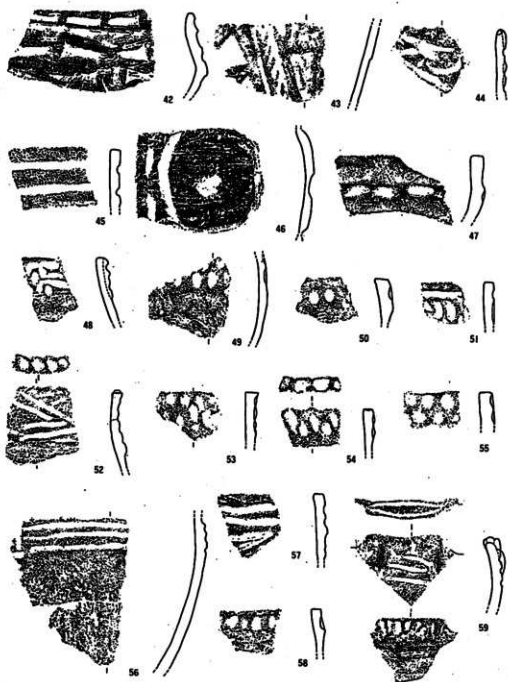
(第9圖 若園貝塚出土土器)



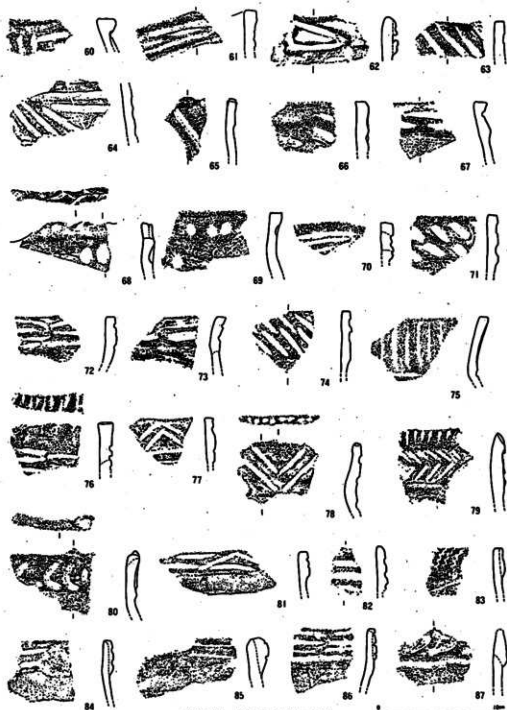
(第10圖 若園貝塚出土土器)



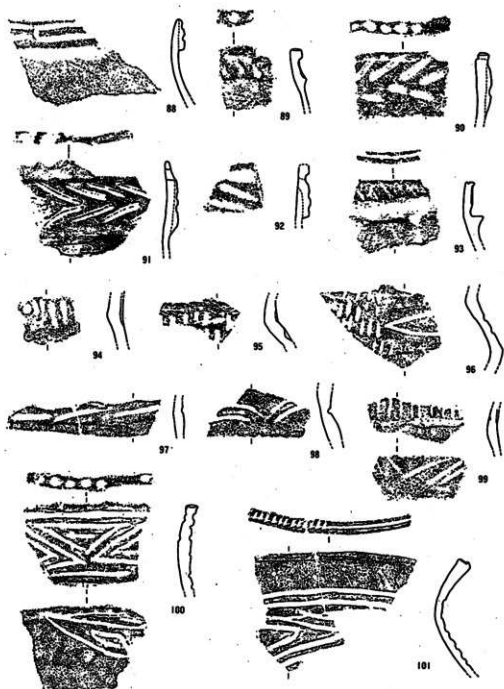
(第11圖 若園具塚出土土器)



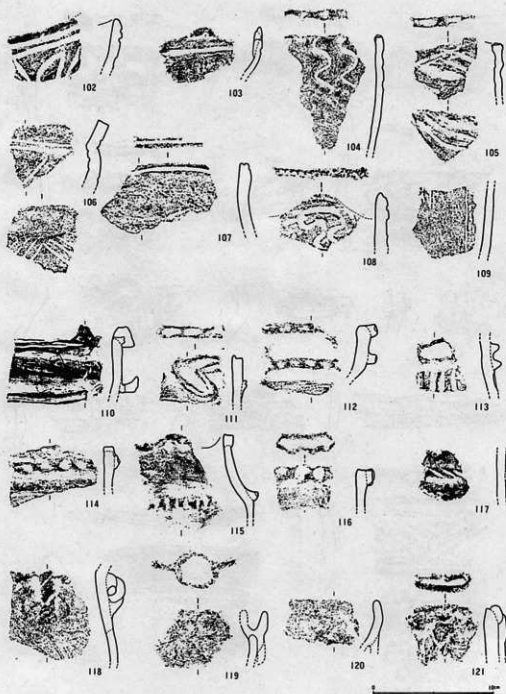
(第12圖 若園貝塚出土土器)



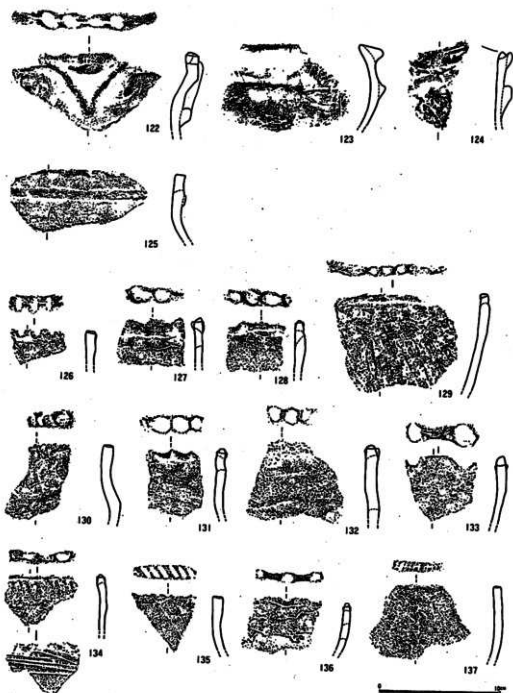
(第13圖 若園貝塚出土土器)



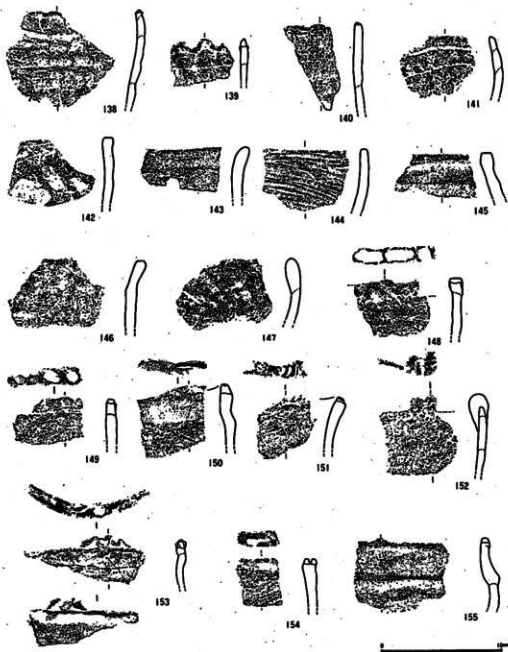
(第14圖 若園貝塚出土土器)



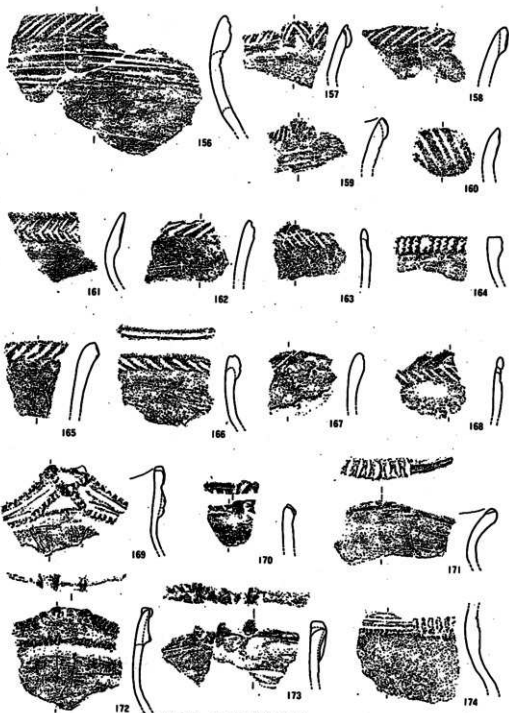
(第15圖 若園貝塚出土土器)



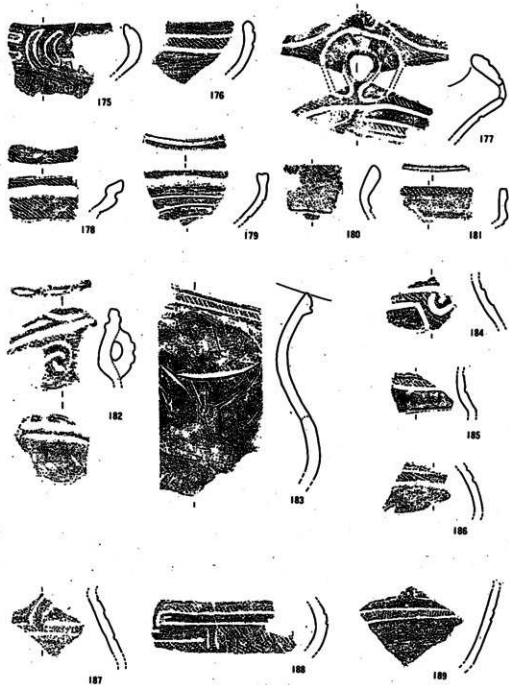
(第16圖 若園貝塚出土土器)



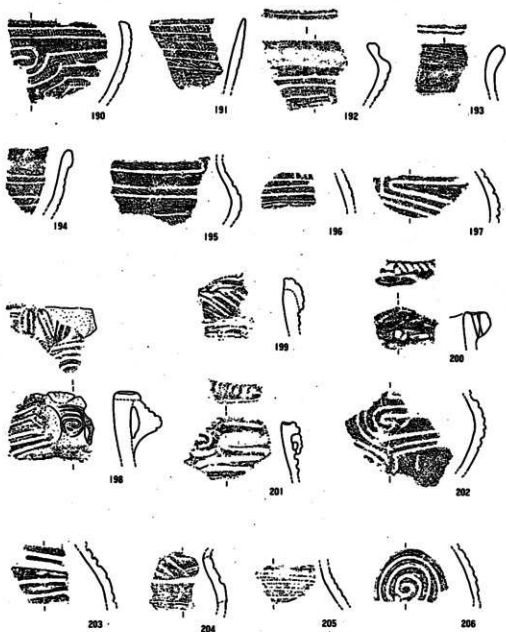
(第17圖 若園貝塚出土土器)



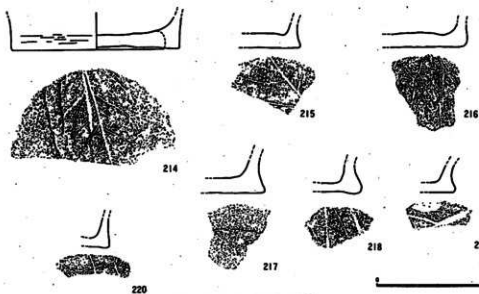
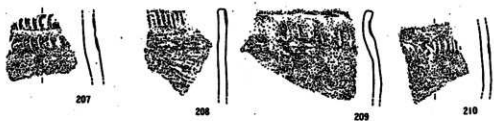
(第18圖 若園貝塚出土土器)



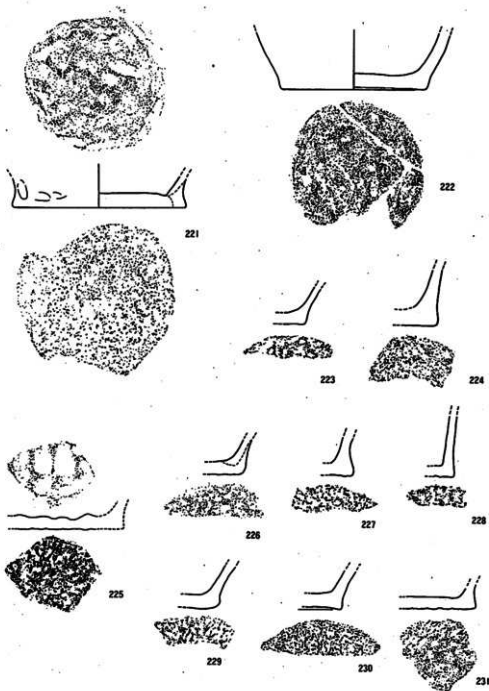
(第19圖 若園貝塚出土土器)



(第20圖 若園貝塚出土土器)

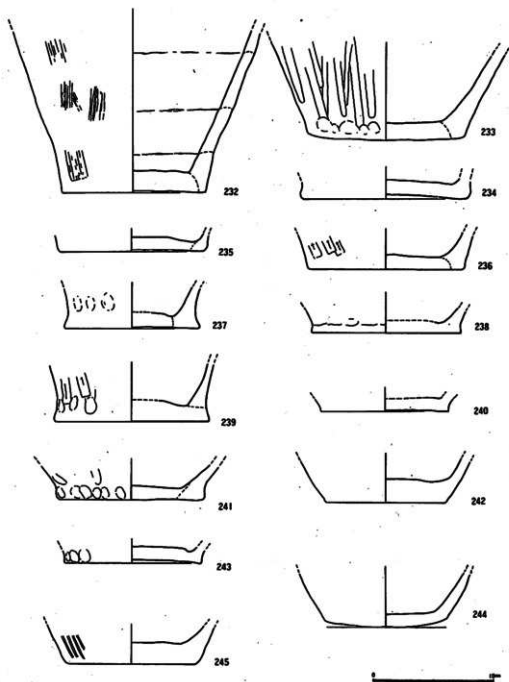


(第21圖 若園貝塚出土土器)



(第22圖 若園貝塚出土土器)





(第23圖 若園具塚出土土器)



246



247



248



249



250



251



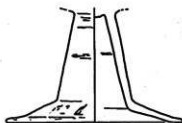
252



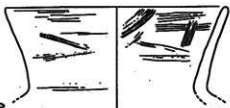
253



254



255



256



257



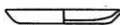
258



259



260



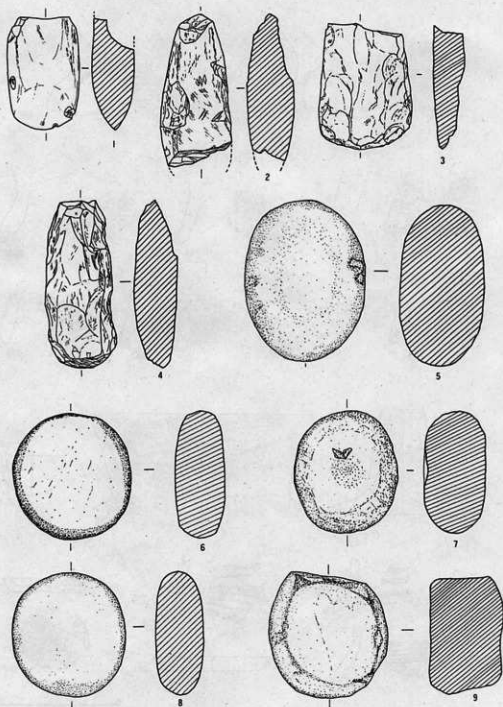
261



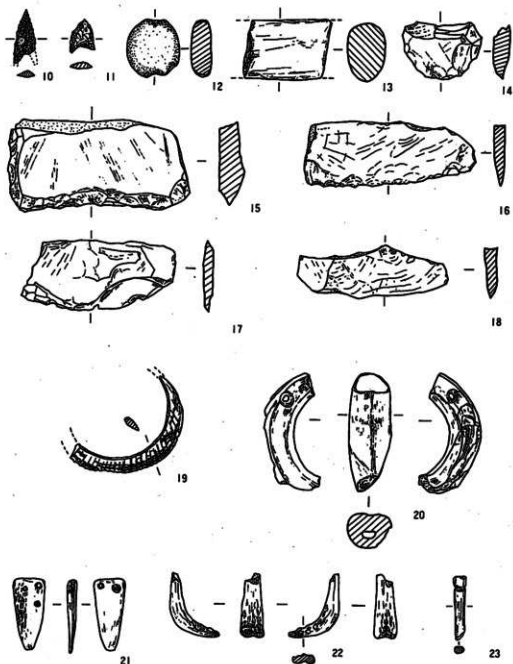
262

(第24回 若園貝塚出土土器)





(第25圖 若園貝塚出土石器)



(第26圖 若園貝塚出土遺物)

〈あとがき〉

若園台地の確認調査を実施するにあたり、調査指導の先生方は言うまでもなく、富田紘一氏、田辺哲夫氏、三島格氏、緒方勉氏の方々からも多くの御教示をいただきました。ここにあらためて感謝申し上げます。

(なお、本書に掲載できなかった埋葬人骨についての報告は、あらためて刊行する予定です。)

——池田道也——

表1 ※「前回の類別」は52年度の「菊池川流域文化財調査報告書」より

[illegible]

60	C a 20・Ⅱ	口縁部は内傾する。	弥生時代文具の使用。	〃	〃	〃	弥生時代
61	C a 23・Ⅲ	口縁部は直行する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。	〃	〃	〃	弥生時代に磨石をきむ。 弥生時代。
62	C a 8・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 粘土ひもの貼り付け。 取り付け上には文様を施す。	〃	〃	〃	弥生時代に磨石をきむ。 弥生時代。
63	C a 14・Ⅲ	〃	弥生時代文具の使用。	〃	〃	〃	弥生時代。
64	C a 12・Ⅴ-b	胴部。	施文は磨石。	〃	〃	〃	弥生時代に磨石をきむ。 弥生時代。
65	C a 10・Ⅴ-b	口縁部はわずかに外反する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 ヘラ削り。	〃	〃	〃	弥生時代。
66	C a 24・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	ヘラ状施文具の使用。 ヘラ削り。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
67	C a 8・Ⅴ-b	口縁部は直行する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
68	C a 19・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
69	C a 14・Ⅱ	口縁部は外反気味に直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
70	C a 27・Ⅱ	口縁部は直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
71	C a 27・Ⅲ	〃	ヘラ状施文具の使用。 文様部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
72	C a 20・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
73	C a 22・Ⅴ-b	口縁部はわずかに外反。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
74	〃	口縁部はわずかに内傾気味。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
75	C a 14・Ⅲ	口縁部は外反する。	ヘラ状施文具の使用。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
76	C a 19・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
77	〃	〃	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
78	C a 22・Ⅰ	口縁部は外反気味に直行する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
79	C a 20・Ⅱ	口縁部はわずかに外反気味に直行する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
80	C a 19・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
81	C a 27・Ⅱ	口縁部は直行。 文様部は直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
82	A b・E-10-Ⅲ	口縁部は直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
83	C a 20・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
84	C a 24・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
85	C a 26・Ⅱ	〃	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
86	C a 17・基礎内	口縁部は直行。 文様部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
87	C a 19・Ⅴ-b	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
88	C a 20・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
89	C a 18・Ⅴ-c	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
90	C a 15・Ⅴ-d	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
91	C a 17・Ⅴ-a	口縁部はわずかに内傾する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
92	C a 19・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
93	C a 22・Ⅴ-b	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
94	〃	〃	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
95	C a 24・Ⅱ	胴部。ふくらむ。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
96	C a 22・Ⅴ-b	〃	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
97	C a 30・Ⅲ	胴部。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
98	C a 24・Ⅲ	〃	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
99	C a 14・Ⅲ	胴部。やや傾る。	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
100	C a 8・Ⅴ-b	口縁部は外反気味に直行する。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
101	C a 22・Ⅴ-b	口縁部は大きく外反し。胴部は傾る。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
102	C a 20・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
103	C a 24・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
104	C a 15・Ⅴ-b	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
105	C a 19・Ⅰ	口縁部は直行する。	ヘラ状施文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
106	C a 18・Ⅴ-b	口縁部はやや外反する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
107	C a 26・Ⅱ	口縁部はわずかに外反気味に直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
108	C a 20・Ⅱ	口縁部は直行する。	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
109	〃	胴部。底面に近い部分。	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
110	C a 12・Ⅴ-b	口縁部はナブに平直。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
111	C a 17・基礎内	口縁部は直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
112	C a 12・Ⅴ-b	口縁部は外反気味に直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
113	C a 14・Ⅴ-c	胴部。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
114	C a 4・Ⅴ-b	口縁部はごくわずかに外反する。 口唇部は平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
115	C a 14・Ⅴ-b	口縁部は外反気味に直行する。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
116	C a 24・Ⅱ	口縁部は直行。 口唇部はナブに平直。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
117	C a 12・Ⅴ-b	胴部。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
118	C a 12・Ⅱ	胴部。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
119	C a 23・Ⅲ	口縁部はやや内傾気味に直行し。 口唇上には貼り付けによる装飾を有す。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。
120	C a 19・Ⅰ	口縁部はやや内傾気味に直行。	弥生時代文具の使用。 口唇部はナブに平直。	〃	〃	〃	弥生時代に砂粒多し。 弥生時代。

表2 ※「前面の類別」は昭和52年度の「菊池川流域埋蔵文化財調査報告書」より

土器番号	出土区・層	形態上の特色	技法上の特色	文様	類別		備考
					前面の類別	前面の類別	
121	C b 1 - V - c	口縁部は直行する。 口縁部は低い山形を呈す。	頸部・仕上げ部は非常に粗雑。	無文	A-V類	無文	胎土に砂粒多く、もうい。 胎土・灰成良質。 明褐色。
122	C a 14 - IV	外反してのびる頸部から、やや内湾気味に口縁部が立ち上がる。	内外はヘラナデ。 胎土はひも状の粗り付け。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
123	C a 22 - V - b	口縁部は直行する。 口縁部は低い山形を呈す。	口縁部は直行する。 口縁部に彩色顔料の残存有り。 ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
124	C a 20 - II	口縁部は低い山形を呈し、直行して立ち上る。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
125	C a 23 - V - b	口縁部は外反。 口縁部はヘラナデ平直。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
126	C a - IV	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	口縁部の前面はヘラナデ直文。	"	B-1類	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
127	C a 24 - IV	"	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
128	C a 22 - V - b	口縁部は直行する。 口縁部は外反を呈す。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
129	C a 16 - V - a	口縁部は外反する。 口縁部は直行する。	外反はヘラナデ。 口縁部に彩色顔料の粗り付け。	"	"	"	胎土に大きな砂粒を含む。 胎土・灰成良質。 明褐色。
130	C a 18 - V - c	口縁部はわずかに外反する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 口縁部はヘラナデによる粗り。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
131	C a 22 - V - b	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
132	"	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
133	"	口縁部は内湾気味に直行する。 口縁部の前面は直行する。	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
134	C a 15 - V - c	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
135	C a 24 - II	口縁部は外反気味に直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
136	C a 19 - V - b	口縁部は外反。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
137	C a 17 - V - b	口縁部は直行する。 口縁部は低い山形を呈す。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
138	C a 29 - II	口縁部はわずかに内湾する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
139	C a 19 - V - b	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
140	C b 2 - V - b	"	内外ナデ。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
141	C a 12 - V - b	口縁部はわずかに内湾する。	内外ナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	B-1類	"	胎土にやや大きな砂粒を含む。 胎土・灰成良質。 明褐色。
142	C a 17 - V - b	口縁部は直行する。	内外ナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
143	C a 20 - II	口縁部は外反する。	内外ヘラナデナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
144	C a 24 - II	口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
145	"	口縁部は内湾する。	外反ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
146	C a 8 - V - b	口縁部は外反する。	内外ナデ。	"	"	"	胎土に砂粒多く、もうい。 胎土・灰成良質。 明褐色。
147	C a 23 - II	口縁部は外反を呈し、胎土は直行する。	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
148	C a 19 - IV	口縁部は直行する。	内外ナデ。 口縁部に胎土の粗り付け。	"	B-1類	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
149	C a 19 - V - b	"	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
150	C a 8 - V - b	口縁部はわずかに外反する。	"	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
151	C a 20 - II	山形口縁部を呈し、わずかに外反する。	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
152	C a 22 - V - b	口縁部は直行する。	"	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
153	C a 19 - V - b	胎土が今や外反し、口縁部は内湾する。	内外ナデナデ。 口縁部に胎土の粗り付け。 外反ヘラナデ。 口縁部に胎土の粗り付け。	"	"	"	胎土に大きな砂粒を含む。 胎土・灰成良質。 明褐色。
154	C a 21 - IV	口縁部はわずかに内湾気味。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	" (増文)	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
155	C a 22 - I	口縁部は内湾気味に直行する。	内外ナデ。 口縁部に胎土の粗り付け。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
156	C a 20 - II	口縁部は外反し、胎土は直行する。 口縁部は外反し、胎土は直行する。	内外ナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	比類文	C 類	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
157	C a 7 - V - b	"	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
158	C a 20 - II	"	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
159	C a 24 - II	"	"	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
160	"	口縁部は外反し、口縁部は今や外反気味と成る。	"	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
161	C a 19 - IV	口縁部は外反し、文様部は今や外反気味と成る。	胎土は直行する。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	比類文(矢羽状)	C 類	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
162	C a 27 - II	口縁部は外反し、口縁部は今や外反気味と成る。	胎土は直行する。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	比類文	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
163	C a 17 - V - a	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
164	C a 20 - II	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	比類文	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
165	C a 23 - II	口縁部は外反。 口縁部は外反。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土に砂粒多し。 胎土・灰成良質。 明褐色。
166	C a 27 - II	口縁部は外反し、胎土は直行する。 口縁部は外反し、胎土は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
167	C a 22 - V - b	口縁部は外反し、胎土は直行する。 口縁部は外反し、胎土は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
168	C a 20 - II	口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
169	C a 27 - II	口縁部は外反し、胎土は直行する。 口縁部は外反し、胎土は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
170	C a 12 - V - b	口縁部はわずかに外反気味に直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
171	C a 17 - 砂土内	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
172	C a 20 - IV	口縁部は外反。 口縁部は外反。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
173	C a 22 - V - b	口縁部はわずかに外反する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
174	C a 19 - V - b	胎土・灰成良質。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
175	C a 20 - II	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
176	C a 14 - V - c	"	ヘラナデ。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
177	"	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
178	C a 19 - I	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
179	C a 20 - II	口縁部は内湾気味に直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
180	C a 29 - IV	口縁部は外反。 口縁部は外反。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。
181	C a 24 - IV	口縁部は直行する。 口縁部は直行する。	内外ヘラナデ。 胎土は直行する。 胎土は直行する。	"	"	"	胎土・灰成良質。 明褐色。

151	C 29 - II	山部口部を重し、わずかに外反する。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
152	C 22 - V-b	口部は直行する。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
153	C 19 - V-b	側部がやや外反し、口部は内傾する。	内外へずなり。 口部上への張り付け。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
154	C 21 - V-b	口部はわずかに内傾気味。	外へずなり。 口部上への張り付け。	# (増文)	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
155	C 22 - I	口部は内反り気味に直行。	内外へずなり。 口部上への張り付け。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
156	C 20 - II	口部は外反し、側部は直る。	特設施文具の使用。 ヘラナデとヘラナリ。	枕施文	C	順	歯土・歯成良。 明成色。
157	C 7 - V-b	口部は直行する。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
158	C 20 - III	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
159	C 24 - II	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
160	#	口部は外反し、口部は中なり気味となる。	特設施文具の使用。	枕施部(矢羽根状)	C	順	歯土・歯成良。 明成色。
161	C 19 - III	口部は外反し、文部はやや内反り気味となる。	特設施文具の使用。	枕施部(矢羽根状)	C	順	歯土・歯成良。 明成色。
162	C 27 - II	口部は外反し、口部は丸味をおびて若干内反りとなる。	内外へずなり。 特設施文具の使用。	枕施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
163	C 17 - V-a	口部は直行する。	内外へずなり。 特設施文具の使用。	枕施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
164	C 20 - III	口部は外反り気味に直行。 口部は直し、ヘラナリ。	口部文部等下はヘラナリ。	明成文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
165	C 23 - II	口部は外反し、口部は丸味をおびて直る。	外反はヘラナリ。 特設施文具の使用。	枕施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
166	C 27 - II	口部は外反し、口部は丸味をおびて直る。 口部は直し、ヘラナリ。	内外へずなり。 特設施文具の使用。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
167	C 22 - V-b	口部は外反し、先端は内側に直る。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
168	C 20 - II	口部は直行する。	口部上には2本の軸土ひもをより合せ直る。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
169	C 27 - II	口部は外反し、山部を重する。	最上への張り込み。	初目目施部等文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
170	C 12 - V-b	口部はわずかに外反り気味に直行する。 波平への張り付け。	内外へずなり。 ヘラナデ文具の使用。	枕施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
171	C 17-巻紙内	口部は直し、外反し、口部は内側に折れ込みを有す。	内外へずなり。 ヘラナデ文具の使用。	初目目(口部部)	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
172	C 20 - IV	口部は外反し、口部は前面部は三角部状となる。	内外へずなり。 特設施文具の使用。	具部文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
173	C 22 - V-b	口部はわずかに外反する。	内外へずなり。 ヘラナデ文具の使用。	枕施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
174	C 19 - V-b	側部、丸く直る。	内外へずなり。 ヘラナデ文具の使用。	枕施文と具部文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
175	C 20 - II	口部は大きく内傾する。 波状部。	波平の波平へ一重なる。 枕施は特設施文具による。	層部施文	D-1	順	歯土・歯成良。 明成色。
176	C 14 - V-c	#	ヘラナリ。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
177	#	口部はくの字状に大きく内傾し、直面部に直る。	ヘラナリ。 波状部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
178	C 19 - I	口部は直行し、大きく内傾する。 波状部。	ヘラナリ。 波状部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
179	C 20 - II	口部は内反り気味に直行する。 波状部。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
180	C 29 - III	口部は外反する。	ヘラナリ。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
181	C 24 - IV	口部は直行するが、側部は内傾へ直る。 波状部。	内外へずなり。	層部施文	D-1	順	歯土・歯成良。 明成色。
182	C 22 - V-b	外反する口部部に波状部が付く。	ヘラナリ。 波状部。	層部施文(記号上)	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
183	C 19 - V-b	口部は前面部三角部状とする。	口部部は外反のみで、内反はヘラナリ。	層部施文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
184	C 26 - V	側部。	内外へずなり。 波状部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
185	C 19 - V-b	側部。	内外へずなり。 波状部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
186	C 21 - IV	側部。	外反はヘラナリ。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
187	C 24 - IV	#	層部は中なり。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
188	#	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
189	C 23 - II	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
190	C 24 - IV	口部は内傾する。 波状部。	波状部有り。 小魚の目施部。	層部の波状部施文	D-1	順	歯土・歯成良。 明成色。
191	C 24 - III	口部は外反り気味に直行。	波状部有り。 ハムイ(波状部)の使用。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
192	C 7 - V-b	口部は直行する。	口部部上へ一重の波状部有り。 波状部有り、小魚の目施部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
193	C 20 - II	口部は外反する。	波状部有り、小魚の目施部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
194	C 27 - II	口部はごくわずかに内傾する。	波状部有り、小魚の目施部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
195	C 24 - III	側部。まるく張り出し、波部へ直る。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
196	C 23 - II	側部。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
197	C 24 - III	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
198	C 29 - III	口部はわずかに内傾気味。 口部は直行するが、側部は内傾へ直る。	特設施文具の使用。 波状部。	枕施文	C	順	歯土・歯成良。 明成色。
199	C 24 - III	口部はわずかに内傾気味。 口部は直行するが、側部は内傾へ直る。	口部部上へ一重の波状部有り。 波状部有り、小魚の目施部。	#	D-1	順	歯土・歯成良。 明成色。
200	C 27 - I	口部は直行する。口部部へ直る部が有る。	特設施文具の使用。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
201	C 27 - II	口部は直行する。 波状部有り。	特設施文具の使用。 波状部。	枕施文	D-1	順	歯土・歯成良。 明成色。
202	C 7 - V-b	側部。内傾する。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
203	A b - E - 9 - II	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
204	C 12 - V-b	#	特設施文具の使用。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
205	A b - E - 9 - II	側部。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
206	C 24 - V-c	#	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
207	C 17 - V-b	#	ヘラナリ。 波状部。	爪形文・田部文	E	順	歯土・歯成良。 明成色。
208	#	口部は直行する。	波状部有り。 ヘラナリ。 波状部。	爪形文	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
209	C 22 - I	口部は外反する。	内外へずなり。 ヘラナリ。 波状部。	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。
210	C 17 - V-a	側部。	#	#	#	#	歯土・歯成良。 明成色。

「^{カンパル}菊水町下津原東の上原石棺について」

永田次郎

1. 立地

上原石棺は菊水町の東北端、菊水町下津原字上原に所在する。菊鹿平野を西流する菊池川がわずかに北上し、やがて玉名平野へと大きく南へ向きを変える屈曲部にあたる。東北へのびる台地の突端上に立地し、菊池川をはさんで山鹿市に対面する。

2. 石棺

石棺は阿蘇溶結凝灰岩を用いた箱式石棺で、主軸はほぼ南北を向く。土砂の採取作業中に発見されたもので、すでに石棺の周囲はかなり削平されていた。このため土層断面の観察、地形測量によっても墳丘の有無は確認できなかった。また、石棺近くで採取した土砂からも同様の石材が発見され、複数の石棺が存在したと考えられる。

石棺も南側の半分以上が側壁下部まで露出した状態であった。残された北側の発掘で、石棺から15cm位の所で墓坑掘り込み面が検出された。

棺身は南短側壁を1枚石、北短側壁と東長側壁を各2枚、西長側壁は南半分を1枚石、北半分を割石積みで構成する。西長側壁の割石積みは下部に比較的大きな石を2枚並べ、その上に割石を積み重ねて高さをそろえたものである。また、側壁と棺身と蓋石の接合部にはつめ石がなされていた。石棺の床面内法での大きさは、長さ182cm、幅36cm（北側）～46cm（南側）である。
(図1)(図2)

床は礫石で、小さな礫が薄く敷いてあった。

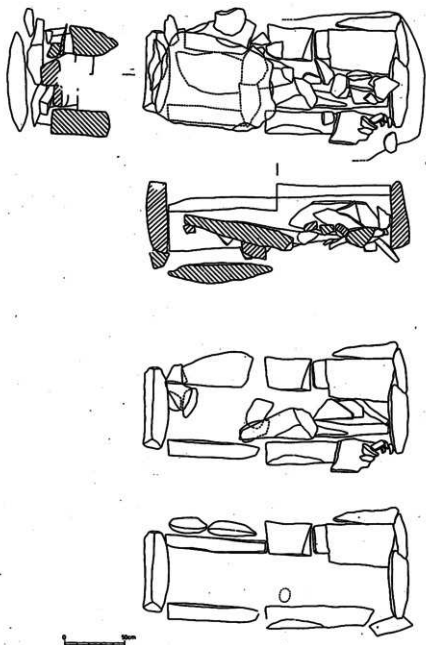
蓋石は南半分を覆う1枚石が残存するだけである。北半分は側壁の積み石と思われる石材が棺内に崩れ落ち、土砂が堆積していた。

遺物としては石棺中央部の床面から頭骨の小片を得たのみである。石棺北側の石組みの崩れなどから、すでに盗掘を受けていたものと思われる。

年代について確定できる要素は何もないが、周辺に分布する石棺の年代とほぼ同じ古墳時代中期後半～後期に位置すると思われる。
(図3)

3. 考察

箱式石棺は構築が比較的簡単で、しかも堅固なため、弥生時代後期～古墳時代後期の長い期間にわたって営まれる墓制である。熊本県下でもほぼ全域に分布し、現在までに約250以上が確認されている。さらにその分布は地域的特色により、菊池川流域、白川・緑川流域、天草



上から 墓石敷土前の平面図、断面図、
墓石敷土途中の平面図、
墓石敷土後の平面図

(第27図 上原石棺実測図)

方、八代地方、阿蘇地方の5地区に分けられる。

①菊池川流域

石棺、石室墳、横穴ともに数多く分布し、熊本県の古墳文化の中心地である。主に阿蘇溶結凝灰岩を用いた石棺は、下流域の玉名平野、中流域の菊池盆地周辺を中心に分布する。また、九州における舟形石棺、家形石棺の分布の中心地でもあり、箱式石棺との関係が問題となる。

②白川・緑川流域

白川流域では金峰山山麓を、緑川流域では吉野山、秋只山、塚原台地を中心に石棺群が展開する。特に塚原古墳群中の円墳において、箱式石棺の石材が時代とともに安山岩から凝灰岩へ変化するという指摘は注目される。
(図3)

③天草地方

有明海と不知火海の接点をなす天草諸島東北部と宇土半島を中心とする。主に岬や山頂に立地するため墳丘をもつものが少ない。石材としては砂岩を用い、棺身の接合部を加工したり、内壁面に装飾を施したものが多い。

④八代地方

海岸沿いや島々に立地し、砂岩に加工や装飾を施した石棺を用いるのは天草地方と同様である。このことから共通の文化の存在が考えられるが、中期以降になると両地域の様相は異なってくる。

⑤阿蘇地方

阿蘇盆地と外輪山西麓の西原村を中心とする。中でも阿蘇盆地北側の山麓沿いには有力な古墳と石棺群が集中しており、比較的豊富な副葬品を伴うものが多い。

以上の地域の中で菊池川流域、天草地方以外の地域では、箱式石棺は中期を境に衰退してゆく傾向にある。天草地方で長く存在するのは、その立地条件から石室墳の代用とされたためである。しかし、菊池川流域では古墳時代全般を通じて、様々の墓制と並行関係にありながら営まれる。これは菊池川流域が他地域と異なり、箱式石棺を用いる階層が後期まで存在し得たためと考えられる。その階層とは、舟形・家形石棺、石室墳に表象される支配者層から一定の距離を保つ在地有力者であろう。上原石棺の被葬者もそうした階層に属する一人と思われる。

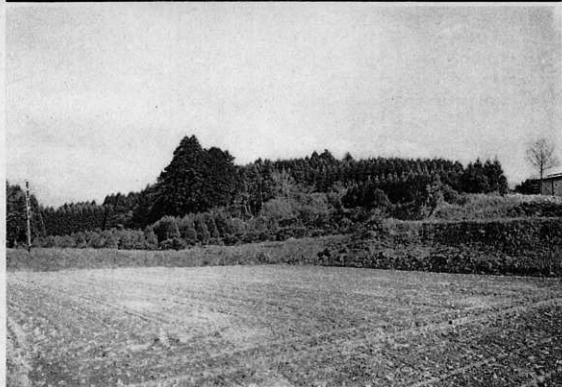
註1. このように側壁に割石積みを用いた箱式石棺の例として以下のものがあげられる。

- ・鍋田東石棺 チブサン
- ・小松山2号石棺
- ・マブシ3号石棺 宇土高校社会部報No1 (1967)
- ・上園古墳 坂本経堯「肥後上代文化の研究」(1979)
- ・塩釜1号古墳

註2. 同様の棺身構造に家形棺蓋をもつものとして寒原2号石棺がある。

註3. 松本健郎「菊池川流域の考古学(1)」熊本史学51号(1976)

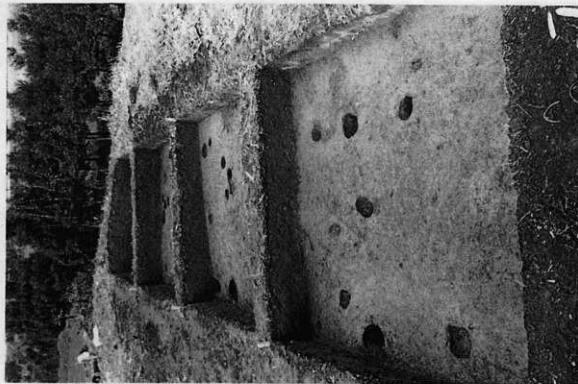
圖 版



上：若園台地近景、下：若園貝塚近景



A-b区、E-10グリッド北壁



A-b区、E-8-11グリッド



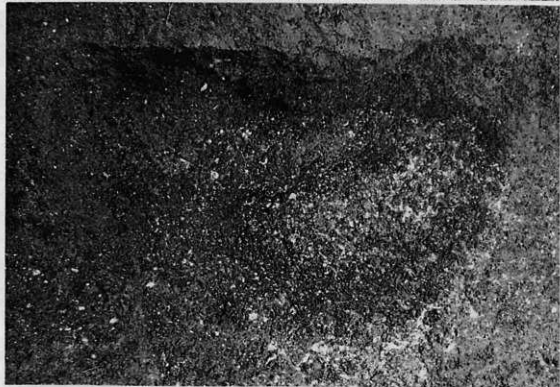
A-b区、E-10グリッド



↑
 16グリッド南壁
 26グリッド南壁
 11グリッド北壁

(第6～7図参照)

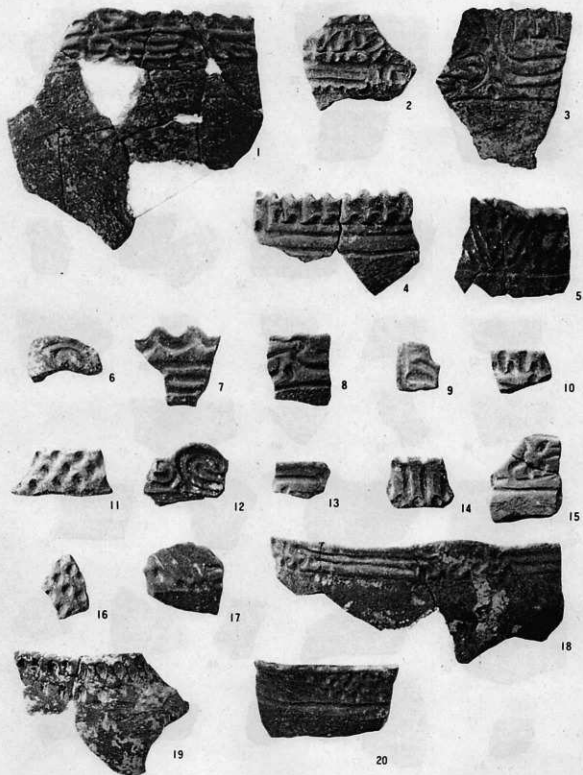
図版3 貝層断面



上：C-a区17グリッド人骨出土状況、下：同墓坑



上：C-a区22グリッド底部出土状況、下：C-a区19グリッド牙製重飾出土状況



圖版 6 (第 8 圖 1 ~ 5、第 9 圖 6 ~ 20)



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



50



51



52



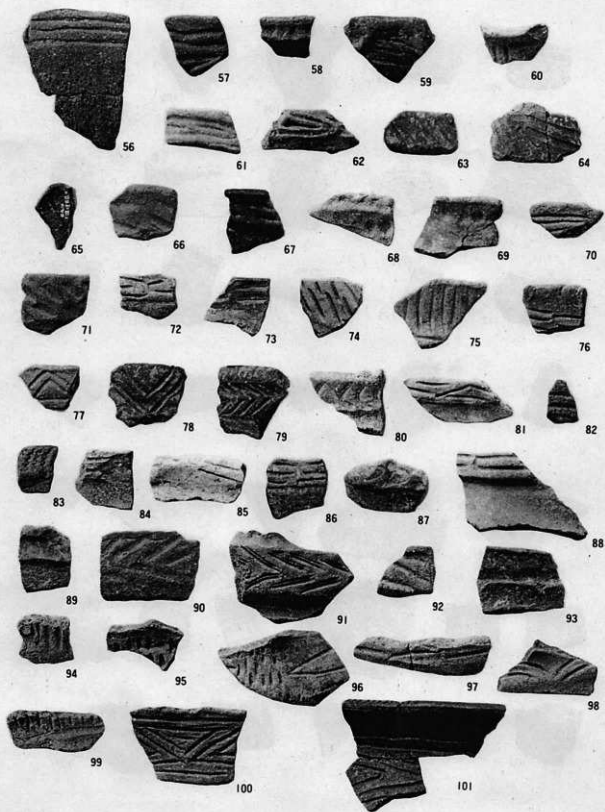
53



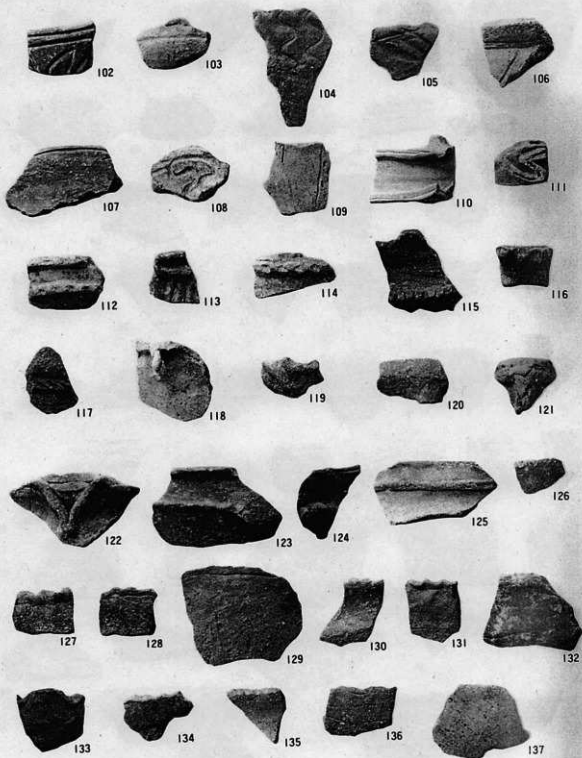
54



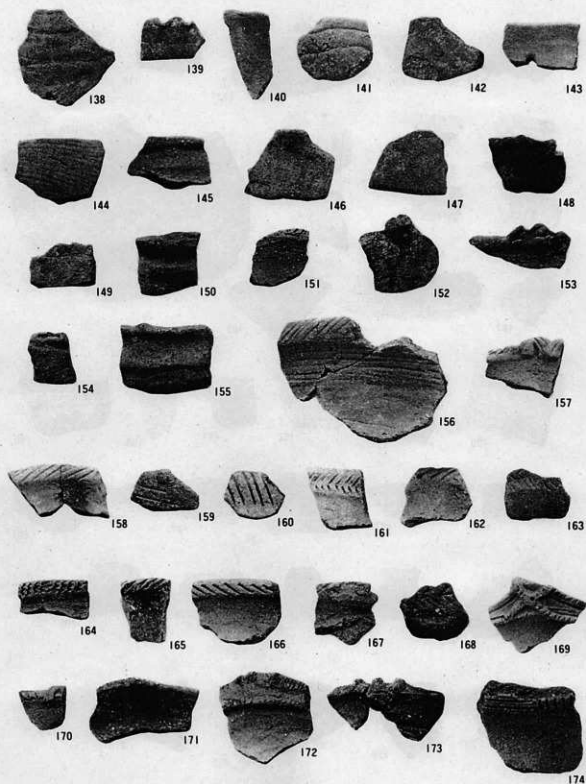
55



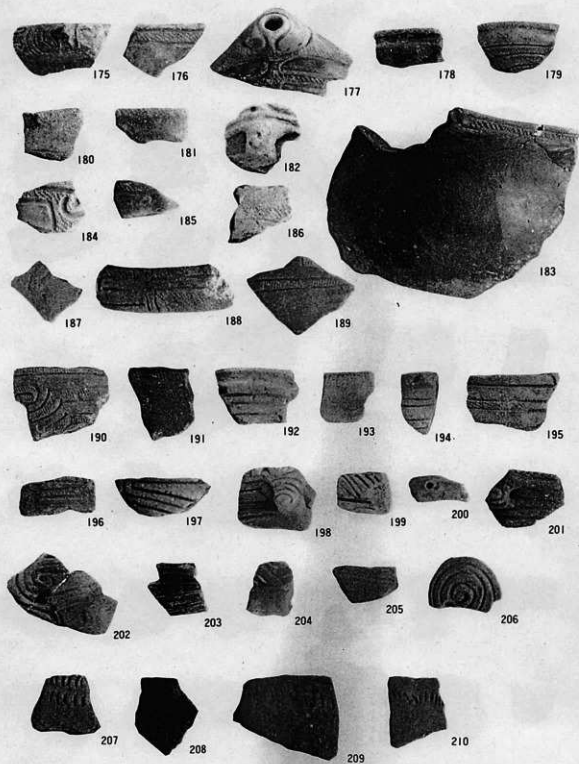
圖版 8 (第12圖56~59、第13圖60~87、第14圖88~101)



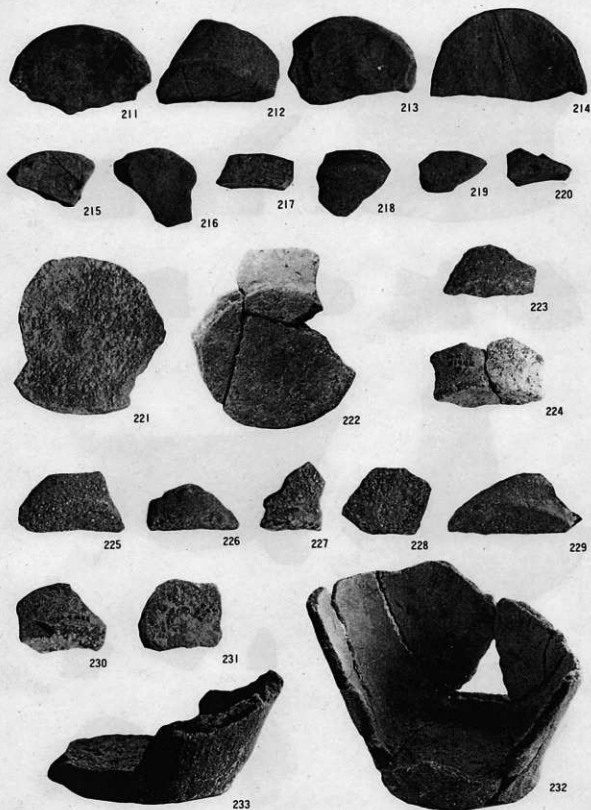
圖版 9 (第15圖102-121、第16圖122-137)



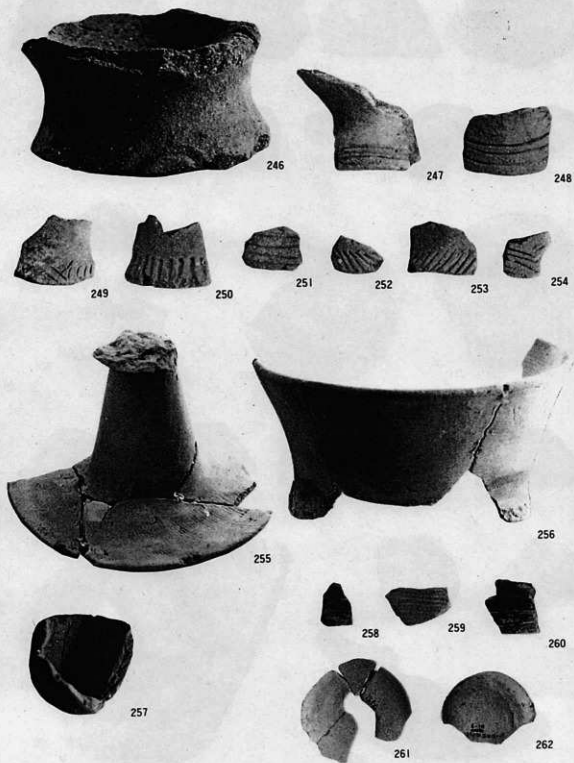
圖版10 (第17圖138-155、第18圖156-174)



図版11 (第19図175~189、第20図190~206、第21図207~210)



圖版12 (第21圖211~220、第22圖221~231、第23圖232~233)



圖版13 (第24圖246—262)



阿高式土器
(第10圖参照)



1



2



3



4



5



6



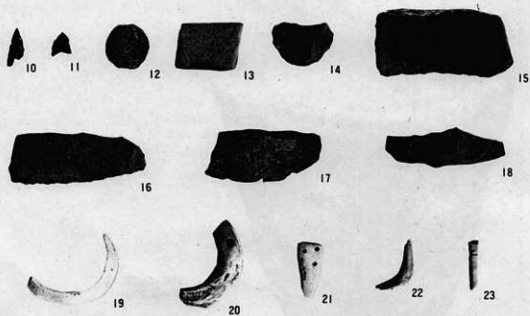
7



8



9



蓋石撤去前



蓋石撤去後